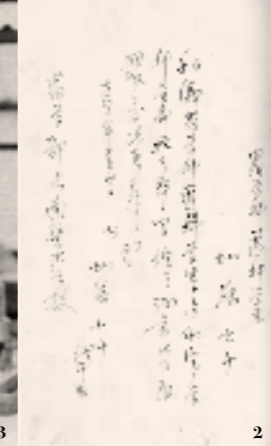


# 挑戦の150年

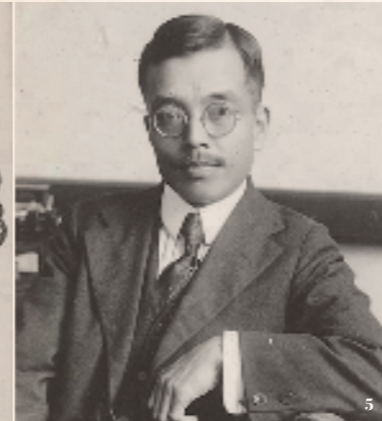
SCENE-19

## 1918-45

「女性の北大入学、加藤セチ」



1. 女性入学に積極的であった佐藤昌介総長 (1920年)
2. 加藤セチの修了証書下付願 (1921年3月30日)
3. 加藤セチ (1930年代)
4. 植物学教室の風景、加藤セチに続き全科撰科入学をした本間ヤスが左端に (1926年ころ)
5. 加藤セチの入学を後押しした森本厚吉教授 (1920年)
6. 加藤セチが星野勇三に宛てた年賀状 (1923年)
7. 理学部数学科の女性たち、左から桂田芳枝、上中雪、大杉富美子、今井昌子、渡邊雅 (1941年)
8. 理化学研究所を訪れた北大生との記念撮影、前列中央が辻村みちよ、右に加藤セチ (1936年)
9. 加藤セチが北大に提出した修了論文「りんご種子発芽に対する乾燥の影響」 (1921年)
10. 加藤セチを指導した星野勇三教授 (1920年)



### 女性が大学に入学するということ

一九一三年九月、三名の女性が東北帝国大学理科大学に入学した。初の女性の大学生である。そして、一九一八年九月、四人目の女性として加藤セチ（一九三〇、一九三九年）が北海道帝国大学農科大学（後に農学部と改称）に入学する。

戦前、女性が大学に進学するのは至難であった。戦前の教育制度は、女性が大学に進学することを想定していなかったからである。当時、最も一般的な大学への進学経路は、尋常小学校（六年間）→中学校（五年間）→高等学校または大学予科（三年間）→大学（三年間）であった。しかし、中学校に進学できるのは男子のみであり、この時点で女性は大学へのルートから除外された。男子の中学校に対応する、女子の進学先は高等女学校（四年間または五年間）である。高等女学校卒業後は、より専門的な分野を学ぶ専門学校（三年間）や、中等学校女性教員養成のための女子高等師範学校（四年間）などに進学することができた。学問を志す女性が得られる最終の学歴は、制度の上では専門学校、女子高等師範学校であった。

また、一九一九年四月の大学令施行までは、日本の大学は東京・京都・東北・九州・北海道の五つの帝国大学のみであった。例えば「早稲田大学」も制度上は「専門学校」であり、大学令施行後に「大学」となる。「日本女子大学」、「東京女子大学」も戦前は「専門学校」であり、「大学」になるのは戦後であった。

### 加藤セチの大学までの経路

では、加藤セチはどういう経路で北大に

入学したのか。加藤は、出身地山形県の鶴岡高等女学校に進学したが、家庭の事情で三年生のときに中退し、教師となるため山形女子師範学校に入学し直した。一九一一年に卒業した後、故郷にほど近い小学校で教鞭をとった。一九一四年には上京して東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に進学し、一九一八年卒業、札幌の北星高等女学校の教員となった。

加藤は、東京女高師を卒業して「一角のインテリになったつもりで教壇に立ったのであるが、その途端に自信が根底から崩れ去った」と回想している。ころしも一九一八年七月、母校東京女高師の生徒が修学旅行に訪れた際、加藤が引率をして北大を案内し、佐藤昌介総長に面会した。

佐藤は、若いころから敬虔なメソジスト派のクリスチャンであり、アメリカ留学の経験も長く、北星高等女学校顧問や東京女子大学理事を務めるなど、女性の教育機会の拡大の必要を強く認識していた。一九一五年六月、北海道連合教育会では「将来は高等女学校の名称を廃して之に代ふるに女子中学校の名を以てして尚更により高等なる教育機関を設くるか或は現在の専門学校又は大学に於て女子を教育し得る設備を為すことの急務なるを覚ゆ」と述べている。東京女高師生徒に対しても佐藤は「この学校は決して女子に門戸を鎖すものではない」と話をした。加藤はこれを聞き、「もう一度勉強のやり直しをしようと決心した」という。

### 女性入学に対する北大の姿勢

加藤は一九一八年八月、北海道帝国大学農科大学に出席した。佐藤総長以外にも、後に女子経済専門学校（現在の新渡戸文化学

園）を設立する森本厚吉、加藤と同じ庄内出身の星野勇三など、加藤の入学に理解を示す教員は少なくなかった。一方で反対意見も強かった。森本が取材を受けた新聞記事によれば、大学への女性入学の可否について日本では定まった見解がないこと、農業実習の課し方、服制に定めた制服をどうするかなどが問題になったようである。この間、加藤は佐藤総長に直談判をし、入学を訴えている。農科大学教授会は最終的に、加藤を正規の学生としてではなく、正規の学生と同じ講義・実習をすべて受講でき、教員の指導も受けられる「全科撰科生」（全科目履修生）として入学を許可する判断をした。

### 大学に学ぶことの感動

加藤セチは、一九一八年九月、北海道帝国大学農科大学に全科撰科入学を果たした。英語などの外国語が頻出する講義に困惑し、

ちしかも生々と躍動して止むことのない姿である事を感じ、又教授の方達はられるかのように見うけられた」（加藤セチ「北大最初的女子学生としての感激」）

「学問とはこのように三次元の厚みをもその専門の学問の中に生命をかけて居

ノートの整理と語学の勉強に追われる困苦と同時に、講義に異常な感動を受け毎日が楽しくてならなかったという。

一九二六年十月、佐藤昌介は宮城県第二高等女学校での講演で北大に入学した加藤について言及している。「男子学生の方もあまり歓迎せず多少いぢめるやうな振舞もあったやうでありましたのに、本人は一向平気で勉強をつゞけ遂には男子からノートを借りられるといふわけで、三年間には男子を凌駕して撰科生の首席となって卒業しました。」

加藤は全科撰科を修了して農学部で副手を務めた後、東京の理化学研究所に入所した。以降、女性科学者のパイオニアとして研究を続けていく。そして加藤に続き一九四五年までに、北大の農学部と理学部に二十四名の女性が入学した。戦後の一九四六年からは、国の法令により大学への女性の進学が一般的に可能となる。



- Hokkaido University HISTORY 1918-46
- 1918年 7月 - 佐藤昌介総長が東京女高師生徒に北大入学を奨める
  - 8月 - 加藤セチが農科大学に出席
  - 9月 - 18日、農科大学教授会が加藤セチの全科撰科入学許可を決定
  - 1920年 4月 - 本間ヤスが農学部副手となる（～1922年3月）
  - 1921年 3月 - 加藤セチが農学部農学第一部の全科撰科修了
  - 5月 - 加藤セチが農学部副手となる（～12月）
  - 1922年 9月 - 加藤セチが理化学研究所に入所
  - 1930年 4月 - 開学した理学部に吉村フジが正規の学部学生として入学
  - 1933年 4月 - 理学部に大森順、錦織美喜が入学
  - 1935年 4月 - 理学部に結城玉江が入学
  - 1936年 4月 - 理学部に横田ゆりえ、添谷晃子が入学
  - 1937年 4月 - 理学部に上中雪、小林よしが入学
  - 1938年 4月 - 理学部に中山久子が入学
  - 1940年 4月 - 理学部に桂田芳枝が入学
  - 1941年 4月 - 理学部に大杉富美子、渡邊雅、樋口薫、米満信、金三純が入学
  - 1942年 4月 - 理学部に今井昌子が入学
  - 10月 - 理学部に井上タミ、藤原隆代が入学
  - 1943年 10月 - 理学部に池田百合子が、農学部副手として山西貞が入学
  - 1944年 10月 - 理学部に前田喜美子が入学
  - 1945年 10月 - 理学部に大久保多津、榎本ツヅ、及川郁子が入学

大学文書館 だいがくぶんしょかん Hokkaido University Archives  
北海道大学に関する歴史的な資料を収集・整理・保存して利用に供するとともに、北海道大学史に関する調査・研究を行っている。